

内陸からの再起

ふるさとを胸に

23

内陸と被災地をつなぐ国道106号。閉伊川沿いに車を走らせると、いつく空気に菓子を焼く湯気がほかほかと上る光景に出合う。

山田町北浜町で菓子工房三石を営んでいた三ツ石勝信さん(55)は、東日本大震災で自宅と店舗を流失。昨年12月、宮古市川井に新店舗「みつし」をオープンした。

トップギア

菓子職人の朝は早い。午前3時に妻の智子さん(58)と共に仕込みを始め、同6時に開店する。

商品はケーキやパンなど幅広く、一番の自慢は米粉パン。地元の豆腐店から分けてもらったおからで作る「おからパン」など、新製品開発にも力を入れる。

「再開直後からいきなりトップギア。久しぶりだったから、感覚を取り戻すのに苦労した」と汗を拭う。地域との交流も盛ん。店の近くには盛岡市が7月に開設した被災地ボランティア拠点施設、かわいキャンブがあり、大雪の時は滞在するボランティアが店の前の雪かきをしてくれた。

北九州市から来たボランティアの祝賀賢一さん(55)は「雪が降った日はスノーを振る舞ってあげるし、パンはほっぺたが落ちるほどおいしいよ」と通い詰める。開店以来の常連だ。

勝信さんは中学校を卒業後、盛岡市で大工に弟子入り。だが、25歳で一転菓子職人を目指した。理由は「寒い外ではなく、暖かい建物

宮古市川井地区 面積56.3・07平方キロ、人口2968人(1月1日現在)。県中部の旧川井村が2010年、宮古市に編入された。盛岡市と宮古市を結ぶ国道106号(宮古街道)が通り、内陸と沿岸の交通の要衝となっている。11年7月には盛岡市が旧宮古高川井校を利用し、宿泊可能なボランティア拠点施設「かわいキャンブ」を開所。地の利を生かした後方支援活動を展開している。

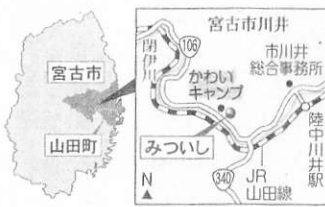
山田町から転居 三ツ石 勝信さん 宮古市川井で店舗再開

の中で仕事があった。三鉄赤字せんべいなどユニークな商品開発も行った。冗談交じりに笑うが、道のは険しかった。盛岡や東京など各地で腕を磨き、45歳でやっと山田町に自分の店を持てた。

「お客さんと近い関係が築きたい」と、山田町の店は自宅と店舗を一緒にした。地域に親しまれる店になるのに時間はかからず、

ゆかりの地

しかし、津波で店は基礎部分を残して流失。仕事道具もほとんど失い、津波で500円も押し流された2階部分を見たときは、ぼろぼろと涙が止まらなかった。親しんだ町並みは跡形もなかった。



絆結ぶ癒やしの菓子

国道106号沿いにある店には、地元住民のほか、ドライバーもよく足を止め



津波で流失した菓子工房三石。2階は自宅だった＝2008年4月、山田町北浜町(三ツ石勝信さん提供)



菓子作りに励む三ツ石勝信さん(右)と妻の智子さん＝宮古市川井

開店後、一番うれしかったのは、地元の男子高校生が通学途中に店に寄ってくれたこと。「若い人が都会に出て、また地元に戻って食べたいと思うような味を目標したい」と前を見据える。内陸と被災地の結節点に上る、甘い香りが、被災者の心を温め、支援者の疲れを癒やす。(文・写真、遠藤大志)

応援メッセージ



再出発共に頑張ろう

山田町飯岡 司法書士 賈洞征功さん(67)

心機一転の開業おめでとう。国道106号にある「甘く、柔らかな癒やしのお店」になってほしい。うちは家族全員米粉パンのやわらかな食感が大好きで、三ツ石さんの店から何度も購入した。店を訪れるたびに、奥さんと一生懸命店を切り盛りする勝信さんの姿に感銘していた。

新しい店は山田の店の雰囲気が残る、懐かしい感じだ。今後も盛岡に向かう時に利用したい。

私も事務所が被災し、旧山田病院の一室を借りて業務を行っている。いずれ元の場所に再建したいと考えており、震災からの新しいスタートを共に頑張りたい。

いわて 東日本大震災